

あいさつ

アマゾン 熱帯森林保護団体

特定非営利活動法人

熱帯森林保護団体

Rainforest Foundation Japan

〒154-0012 東京都世田谷区駒沢1-8-20

TEL: 03-5481-1912 FAX: 03-5481-1913

MAIL xingu@rainforestjp.com HP www.rainforestjp.com

[ご住所等ご変更ございましたらご連絡いただけますと幸いです]



HOW TO HELP

年会費	大人	5,000円
	18歳以下	3,000円

年会費・寄付金振込先

口座名	熱帯森林保護団体
ゆうちょ銀行	郵便振替口座 00140-3-144187
三井住友銀行 東京中央支店	普通口座 7066247

※ 銀行振込の方は、必ずお名前とご連絡先を別途、当団体までご一報をお願い致します。

今、思うこと

コロナ現象が2年間続き未だに世界中が振り回されているにもかかわらず、オリンピックが2回も催され、コロナ蔓延防止の対処療法としてワクチン摂取の奨励がマスコミ一面で日々取り上げられている。しかし何故?このようになったかその原因を考え改善しなければ、再び新たな感染症が発生するだろう。文明社会に暮らす人類の欲を満たすため、開発による無差別な自然環境破壊、その犠牲になるのが動植物やその地で営む人々。多くの命と引き換えに私たち文明人は、便利で物質的に豊かな暮らしを得ている。加えて気候変動の加速でシベリアの永久氷土が崩壊し始め、そこここで火山噴火、地震等が起きている。荒唐無稽に思えるが、まるで魔界の扉が開いたかのような負なるパワーがこの星を覆っているように私は感じる。人は我が幸せや気持ち良さを追求するが、同時に他者にその行為が迷惑にならないか?も考えるべきだろう。

30年前にカヤポ族のラオ一二長老が語った「お前たち家族が食事中に知らない白人が家に入ってきて、今すぐここから出て行け!と言われたらどうする?わしらの歴史はその繰り返しだ」個々の欲が大きなエゴ団子になり戦争も起こる。誰も人など殺したくないのに。他者を慮り、不便さを心地良しとした優しさを多くの人が持てば、魔物たちも静かに魔界へ戻ると信じ、アマゾンの自然とインディオの人たちのお役に立つよう、微力ながら支援を続けていく。人類破滅に少しでも歯止めがかかりることを祈って。
(南 研子)

アマゾンの森林消失が22%増加し 2006年以来最高に

ブラジル国立宇宙研究所(INPE)が発表した公式データでアマゾンの森林消失面積が2021年7月末までの1年間に13,235km²と前年比22%増で2006年以来最高に。アマゾナス州の55%増を筆頭にアマゾン9州全てで増加。ブラジルアマゾンは1970年代初頭に比べ20%近く森の表土が減少し、広範囲がサバンナへ移行する臨界点に近づきつつあると科学者は警告。炭素排出増加、生物多様性喪失、降水量の減少とともに森にすむ先住民などへの深刻な影響が懸念される。
(Mongabay11月18日)

RFJオリジナルグッズ

カヤポ模様のコースター [10cm×10cm]
2枚組1,000円(送料込み)

※当団体へご注文ください

ひと瓶の「ハチミツ」の向こうに広がる大きな世界

養蜂事業現地コーディネーター：ウェメルソン・バレステル

写真:下郷さとみ、ウェメルソン・バレステル

インタビュー:下郷さとみ(ジャーナリスト/支援事業コーディネーター)

—— ようやく現地に入れましたね。村のようすはどうでしたか?

この2年、衛星インターネットのある村では通話アプリを使ってリモートで支援を続けてきましたが、やはり、人と人が直接に顔を合わせるというのは全然違いますね。現場で養蜂士たちとやりとりしながら細かなアドバイスができるようになりました。どの村も厳しいコロナ禍を自給自足の力と薬草の知恵で乗り切ってきました。そして、この逆境をバネに、コミュニティ全体の意識が深まっていたのを感じました。自分たちで力を合わせて森を守っていくことこそが大切なんだ、という意識です。彼らのたくましさにはいつも感服させられます。



—— 養蜂事業のどんなところにやりがいを感じていますか?

この事業の目的は、「森の恵みのハチミツを市販ルートに乗せることで持続可能な経済を作り出す」です。これを経済の指標だけで計るならば、ローカルでちっぽけな試みにしか見えないかもしれません。でもこの事業がもたらすものは、もっと広くて深いですね。アマゾンの森の価値の再確認、先住民自身の経済的自立……。これらはすべて、先住民が自身の土地を守り抜く力に直結します。だから私は、この養蜂事業に希望を見出しているんです。そしてこの仕事は、私の魂に栄養を与えてくれます。養蜂士たちが立派に育っていく姿やコミュニティが力強くなしていく姿を見るのは本当にうれしいですし、自分自身も心が豊かになれる感覚です。

—— そもそも養蜂や先住民族に興味をもったきっかけは何ですか?

大学卒業後の1997年に、ISAとATIX(訳注:先住民族支援のブラジルのNGO)がシンゲー川の中流域で養蜂事業を始める知りました。どうしても活動に参加したくなり、サンパウロ養蜂家協会で講習を受けたのが私の養蜂専門家としてのスタートです。それから数年間ほど、ISA・ATIXの養蜂プロジェクトの技術指導者としてシンゲーに通うことになりました。ちょうど同じ時期に先住民の村の学校に教師として赴任してきた女性がいて、それが妻との出会いなんですけど(笑)、いろいろな意味でシンゲーは私の人生にとって大切な場所です。その後、RFJから声をかけてもらい、念願のシンゲーでの活動に再び戻ることができました。上流域はISA・ATIXの養蜂事業の空白地帯でしたから、この地域の先住民にとってもRFJの支援は念願のものだったと思います。ですから、私も関われてとても光栄です。この10年は、あっという間でした。



—— 昨年末の現地訪問に引き続き、今年も忙しくなりそうですね

今年、蜂蜜加工施設を建設したミラソウ村は、政府の食品流通にかかる認証とオーガニック認証を取得するプロセスに入ります。ミラソウの養蜂士たちは、これをずっと待ち望んでいました。彼らは技術的にも経営センス的にもとても優秀です。サンパウロなどの大都市のショップに彼らのハチミツが並ぶ日が来る楽しみにしています。既に認証を取得済みのカラパロとマチブの村では、再開予定の政府認証更新手続きにのぞみます。今回の訪問では、農業省の担当者と養蜂士のリモート会議のサポートも行なってきました。コロナ禍で2年間止まっていたハチミツの流通ルートが今年こそは再始動されるはずです。養蜂事業に加わったばかりのアフクリ村でも、今年は本格的に活動を進められると期待しています。



—— 日本の人たちへのメッセージをひとつお願いします

私にとって先住民と共に働くのは、そしてRFJのような同じこころざしを持つ信頼できる人たちと共に働くのは大きな喜びです。いまアマゾンの森は危機的な状況です。その森を守るのは先住民の人たちです。小さなひと瓶のハチミツの向こうに大きく広がる養蜂事業の意義を、ひとりでも多くの方が理解して応援して下さることを願っています。ありがとうございます!

日本NGOのパイオニアのような存在。筑波大学院教授時に当団体スタッフ2名、岩崎さんを慕い院生になった。懐が広く柔軟でぶれない生き方がカッコ良く、魅力的な先輩として尊敬しています。

素直な選択を直感的に捉え、心身共にバランス良く自分に取り込み、ステキに生きている魅力的なシングルマザーの直子さん。

■ アマゾンの日常を知る

建築家 岩崎 駿介

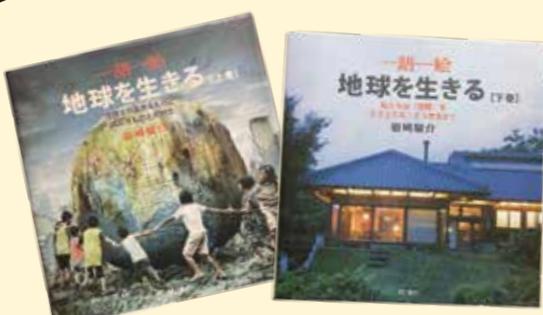
僕らは、南研子さんをはじめとする「熱帯森林保護団体」の活動があるから、アマゾン奥地の先住民の生活を、実感をもって知ることが出来る。僕は、南さんと同じく日本国際ボランティアセンター（JVC）というNGOを作り、数多くの南の国の人々と付き合ってきたが、僕らは彼らの生活を知ることによって、僕らの人生を豊かにすることが出来、同じ地球に起きる人間として深く共感し、また学ぶことが多い。

僕は、アマゾン先住民から直接に聞いた言葉の一つに「土地は、分けてはならない」というのがある。基本的には、この地球上のどこの一点であろうと「土地を分割し、個人所有してはならない」という意味であり、現代資本主義社会の根源である「土地の私有制」についての痛烈な批判である。アマゾンの人々が、なぜこの恐ろしいほどの近代世界の中で、伝統的な生活を今でも保ち得るのか、それはひとえに「自然」があまりにも豊かだったからである。逆に言えば、西欧をはじめとする近代科学技術文明は、実に貧しい自然、貧しい土地から生まれた文明であり、それだけに悪戦苦闘の歴史を持つとはい、その根源において地球破壊的な性格を持つ。実は、アマゾン以外にも、世界いたるところに「先住民」と称する人々があり、自然と循環的な関係を持って生活してきた。しかし、近代文明はこれらの人々を、山に追いやると同時に徹底的にその命を追い詰めて、絶滅の危機に追いやっている。

僕は、このような歴史を振り返って、「丸い風船は、先がとがった槍にはどうしても勝てない」と思うのだ。つまり、心やさしき人々は、槍のように人を射貫く人々にはどうしても勝てず、死滅する運命にあるというのが、われわれ人類が抱える根源的な課題なのである。同じく北アメリカの先住民は、1620年、メイフラワー号によって西欧人がアメリカ東海岸に到達したとき、なぜ何も言わずに助けたか。それは、助けることが彼らの義務であったし、神から与えられたともいべき絶対的な掟だったのである。しかし、1890年のウンデットニーにおける米軍第7騎兵隊による先住民虐殺に至るまでの270年にわたって、先住民を傷み続け、今日のアメリカ合衆国の繁栄を謳歌しているのだ。

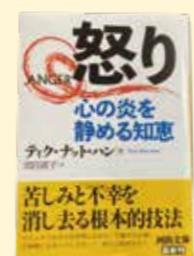
心安らかな人々は、追い詰められる。しかし、恐らく人は、他者とのつながりを求めて生きているにかかわらず、人を殺すことを先行させる。僕は、これはひとえに人が自分に嘘をついているがゆえに巻き起こる現象であり、その現象を助けてきたのは西欧文明の根源、キリスト教かも知れないと考えている。

いずれにせよ、「熱帯森林保護団体」は、この文明の行く末を確かめる意味でも、活動を続け、アマゾン熱帯林における「心安らかな人々」の日常を知らせ続けてほしい。われわれは蘇るか…さもなくば死すかの分かれ道に、いまわれわれは差し掛かったと言わざるを得ない。



地球を生きる【上巻・下巻】
岩崎 駿介/著 明石書店

書籍のご紹介



「怒り」心の炎を静める知恵
ティク・ナット・ハン
岡田 直子/訳
河出文庫

■ 「ボクがおじいちゃんになる前に地球はなくなる？」

RFJスタッフ／『怒り』(ティク・ナット・ハン著)翻訳者 岡田 直子

「コロナ、気候変動、戦争、噴火…ボクがおじいちゃんになる前に地球はなくなっちゃうんじゃない?」7歳の息子が無邪気に聞いてくる。つい最近もニュースを見て「戦争怖い。戦争になって欲しくない、ママと別れるなんてヤダ」と泣くのを懸命になだめたこともあった。

10年後、30年後…世の中がどうなっているのか？前だって分からなかったが、最近は1ヶ月後、半年後のことさえ分からない。子どもが地球の未来に不安を感じるのも無理はない。

「今、生きている人間次第」と私は子どもに伝えているが、伝えながらいつも自省し、自問する。自分はそのために行動できているか。どうしたら「大丈夫！」と言ってあげられるのだろう。

学生時代に環境問題に関心を持ってから、市民運動やNGO、デモ、署名運動、選挙、国際キャンペーンなどに関わり、「何かしなければ」と思うことには何らかの行動をしてきた、少なくともそのつもりではあった。でも子を産み両親を見取るライフステージが変わったせいか、コロナ禍で何かが麻痺しているのか、そのような思いや行動がどこか遠い過去生のことのように感じる。前のように何かに反対して声を上げたり運動を起こしたり、というエネルギーが湧いてこない。

“Be the change you want to see in the world”(自分が世の中に求める変化に、自らがなりなさい)—最近このフレーズをよく思い出す。

若い社会起業家や活動家、そして地道な活動を30年継続されている研子さんの姿勢から共通して感じるのは、世の中に変化を生み出し、新しい時代を拓いていくのは、絶望、怒り、焦り、批判、自己犠牲、闘うといったエネルギーではなく、喜び、楽しみ、対話、安らぎ、など明るく軽やかなエネルギーなのではないか、ということだ。

今年1月22日、禅僧であり詩人、平和活動家でもあった世界的な精神的指導者であるティク・ナット・ハン師が95歳で亡くなった。僧院に籠って修行生活を送るだけではなく、社会と深く関わる“行動する仏教”を提唱し、ベトナム戦争の最中、苦しむ人々を救い、戦争終結の和平提案を行い、マーティン・ルーサー・キング牧師からノーベル平和賞に推薦されたことでも知られるハン師は、「マインドフルネス」=今この瞬間に気づき、目覚めていることこそが、自分や家族、地域、ひいては世界に真の平和をもたらすと說いた。ハン師のご逝去に際し、高弟のお一人が法話で語っていた：ハン師は毎年、自分の誕生日に“もの”は何も受け取りたくないとおっしゃった。唯一望まれたのは、出家した僧侶・尼僧一人一人から“実践(修行)への願望”を聞くことだった。今この時にこそ、ハン師に約束したいことを実践することが、師の人生と教えへの感謝を示し、彼の慈悲と平和のエネルギーを世界で継続していく捧げものになる、と。

子どもからの問い合わせへの、私なりの答えをハン師に改めて示して頂いたように感じた。15年ほど前に米国にあるハン師の僧院に滞在させて頂き、ご著書を翻訳させて頂くという貴重な機会を頂いた一人として、またこの時代を生きる大人として改めて、今この瞬間に生きている幸せに気づくこと、自分の呼吸に立ち戻り微笑むこと、そしてすべてのものや人は繋がりの中に存在するからこそ、私たちの日々の思いや言葉、行動が持つ大きな力を認識して、子どもがおじいちゃんになる頃にもこの地球が健全な状態するために、自分にできる具体的な行動を、小さな一步からでもしていくことを誓いたいと思う。

*2021年度の会計報告はホームページに記載しています

「あぱっさ」33号2022年2月発行